



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	石川明人『私たち、戦争人間について一愛と平和主義の限界に関する考察一』（創元社、二〇一七年）
Author(s)	木村, 晶子
Citation	基督教學, 53, 30-34
Issue Date	2018-07-13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75524
Type	journal article
File Information	04kimura.pdf



石川明人『私たち、戦争人間について ―愛と平和主義の限界に関する考察―』

(創元社 二〇一七年)

木村 晶子

本書は前年に発表された『キリスト教と戦争「愛と平和」を説きつつ戦う論理』の続編と言ってよいと思われる。人間は平和を唱え、願いながらも戦争をしてしまうこともできる。この矛盾をはらんだ人間の謎に果敢に挑むエッセイである。前著においては、愛と平和を説くキリスト者が戦争を行うという論理的矛盾を中心に述べられていたが、本書では、さらに人間性そのものの中に暴力行為に及ぶ性質が含まれているのか、本音と建前のはざまに揺れ、きれいごとですまそうとすることの方が多い人間の内面を深く掘り下げた内容となっている。また、戦争に関する参考文献や情報にも圧倒されるものが

ある。本書は、前年に発表された著作同様、研究書というより、広く一般の人々を対象としており、戦争と平和、そして人間性についての考察を促すには大変刺激のある書と言ってよい。

まず本書の構成について述べよう。

序章 この世界のいったいどこに神がいるのか

第一章 戦争の原因は何か、という問いについて

第二章 戦争は人間の本性に基づいているのか

第三章 戦争の役に立つ技術と知識

第四章 あまり自明ではない「戦争」概念

第五章 戦時における人の精神と想像力

第六章 私たちの愛と平和主義には限界がある

となっている。

序章では、ルワンダで起きた虐殺の件を挙げて、人間の残酷さについて問いかける。このような虐殺を目の前にしたとき、人間の善性を疑いたくなり、さらにはこのような事態においてなぜ神は沈黙しているのか、神が本当にいるのかと問いたくなるが、究極的には、人間とは何かという問いに行き着く。本書の目的は、戦争のさま

さまざまな側面を追求し、戦争に向かう人間の心理や本性について探ってゆくことである。

第一章では、戦争の原因は何かという問いに対する答えを探る。さまざまな原因が論じられ、たとえば、競争・不信・自負（ホップズ）、あるいは3つのG、God・Glory（石原朋之）などが挙げられている。

そのほか、利益のために戦うことも考えられるが、人間は必ずしも利益のためにだけではなく、自己犠牲や献身など、他者からは損失にしか見えないことに価値や喜びを見い出すこともあると筆者は指摘する。「復讐」や「価値観の相違」も原因となりうるが、著者は、「人は異質なものに対してよりも、類似したものに対しての方が敵対心を持ちやすい」と指摘している。さらに、「危険」・「緊張」・「楽しみ」も戦争の要素だとされ、人間は戦うために目標をつくりだすことさえあるという。しかし、どれ一つ決定的な原因と言えるものを挙げることは不可能である。きっかけはあるがそれ自体が原因ともいえず、戦争の原因を問うこと自体、難しいと筆者は述べる。

第二章においては、戦争が人間本性に基づいているのかという問いを立てている。人類の歴史をたどれば、人間が動物である以上、本性的に暴力性・攻撃性・サディズムを持ち合わせていると認められる。しかし、スティーン・ビンカーによれば、人間には人を暴力に駆り立てる5つの「内なる悪魔」と「四つの善なる天使」が存在し、人間の「本性」は暴力へと向かうこうした動機を持ち合わせていると同時に、適切な環境が整っていれば、こうした五つの悪魔を押さえ込むことも十分できるという。（『暴力の人類史』）ビンカーは、暴力を回避して協調や利他的行動へ向かうとする動機、つまり平和へ向かってゆこうとする動機も生まれながらに備えていると主張し、筆者もこの可能性を認めている。それゆえ、戦争の原因が人間本性であるなら、人間のあらゆる行動の原因が本性だということになってしまうので、本性そのものが戦争の原因とは考えにくい。抑制する力も持ち合わせていることに平和へのかすかな希望があると筆者は考える。

第三章では、戦争に役立つ様々な技術と知識を挙げて

いる。道具の発達の歴史に伴って、兵器も発達し、化学兵器、生物兵器、核兵器も登場するようになった。

そして、科学はもちろんのこと、あらゆる学問分野も軍事に貢献し、我々の身の回りにある日常的なモノでさえ、戦争に役立つ道具となっているという。本来武器ではないものまで利用され、間接的に軍事に役立つ 것이라고言える。「軍事は文化の一領域というよりも、むしろ文化そのものだと言っても過言ではない。」(一五二頁)と結論づけている。

第四章では、「戦争」の概念について考察している。

「戦争」といっても呼び方もいろいろあり、普遍的な概念を決定するのは難解である。事実、武力闘争だけが戦闘ではなく、いまやあらゆるところが戦場になり、戦争と非戦争、軍事と非軍事という境界線を引くことが難しい時代になっているのだという。通信機器の発達により、人為的な株価の操作、ハッキング、サイバー攻撃なども兵器の新概念に加えられ、戦争はもはや職業軍人のみならず、一般人も参加できる状況となっている。そして、むしろ非軍事の戦争行動が世界で頻繁に繰り広げら

れ、それが広がっていると指摘する。

第五章では、戦時における人間の精神状態や心理について述べられている。戦争をする際には、まずは戦争を正当化する思想が必要である。自分たちの「正しさ」を意識させることが重要であり、これこそが戦争と犯罪の違いであるという点があげられる。単に戦争が正当化されるだけでなく戦いが個々人にとって意味や意義のあるものとされると、人は残酷な行為も平気で行える。恐怖心を勇気や名誉といったことで払拭し、様々な方法で、精神を鼓舞する。戦時には、奇妙と考えることもまことしやかに行われるが、このような現象は戦時だけではない、と筆者は述べる。

第六章では、人間が愛と平和を説くには限界があるという指摘である。「互いに愛しましょう」とか「平和のために祈りましょう」と、いくらきれいなことを言っても心からそれを実行できるのかは疑問だと筆者は言う。平和の構築といっても、実際には理想論だけで終わってしまうことも多々ある。その例として「世界政府」のような構想もあるが、世界の誰もが納得する「正

義」を求めても、そのようなものは現実にはありうるだろうかと疑問を投げかけている。一方では、ステイブ・ビンカーの論点を挙げ、現代では数字的にみると確かに暴力は減少傾向にあることを認めている。それは、情報の共有が増えたことによって相互理解が深まり、無知・偏見が減りつつあることによるものである。しかし、筆者によれば、知識と理解が必ずしも平和を生み出すことにつながっているわけではないと述べ、因果関係の複雑さを指摘している。

結論としては、戦争と平和について考えるうえで重要なのは、愛の問題ではなく、「人は人を愛せない、全ての人は愛せない」という単純な事実認識が大事なのである。」(二七六頁)ということである。

本書は「人間とは何か」をいろいろな角度から追究しており、多くの疑問を投げかけながら、読者を惹きつけている。さらに、戦争とは何か、人間本性とどのように関係しているのかについて深く考察することによって、人間の内面の複雑さ・二面性・葛藤など、誰もが持っているが普段はあまり触れたがらない側面を伝えている。

ただ、いくつかの点で疑問が残る。たとえば、筆者の「戦争も平和も文化である」という捉え方である。文化はそれぞれの地域によっても異なるのだから、戦争や平和もそれぞれ異なっているのだということになる。命についての捉え方も時代によって異なったことも事実であろう。しかし、だからと言って戦争と平和を相対的に捉えることにはいささか疑問を感じる。どの文化にも存在する絶対的な価値観を求めるのは不可能なのだろうか。

また、「暴力に話し合いで応じましょう」というのは全くナンセンスである。(二七一―二七二頁)「戦争もときには正義である」(二七二頁)という主張には、非暴力主義者からは反論が出るであろう。もともと、それに対してどういった解決法があるかと問われると答えが出てこないことも認めざるをえない。筆者が指摘する通りこれはすべての人にとっての難問である。

「人は人を愛せない」という筆者の結論は、平和の現に対する悲観的な結論になり、ややもすると人間の善性は表面的なものでしかないというふうに思われてしま

うかもしれない。

しかし、『希望』と称して、人間のきれいな側面ばかりみようとすると。だが、それには自分自身のなかにも確かにある醜い部分から目を背けるのにも都合がいいという、隠れた動機もあるのではないか。」(二七三頁)という指摘には頷ける。筆者の指摘通り、確かに、戦争について考えるということは、自分の中にある利己心・執着・憎悪・欲望などを正直に見つめ、認識することである。「平和の困難さについて考えるうえで大切なのは、正直に自分自身のダークな側面にも目をむけることではないか。」(二七三頁)これこそ筆者がもっとも訴えたい点であろう。

最後に、楽観的な考えと受け取られるかもしれないが、一方ではピンカーが指摘するように、現代では、多様性が認められつつあり、宗教的寛容の精神も広まり、様々な差別や偏見にも目が向けられるようになってきたと言えるのではないか。ここにささやかな希望を持つことは可能ではないだろうか。自信や信念、信仰や希望も現代こそ必要なことではないかと思われるがいがな

のだろうか。平和の実現に一番必要なことは、日常生活において自身を謙虚に見つめ、己の傲慢さや弱さに気づき、他者の弱さや欠点を受け入れてゆく努力に他ならない。これは人間本性として最も大切なことであり、むしろこれこそ愛の行為と呼べるのではなからうか。